



北斎を追って

ディオゴ・カウパテス（サンパウロ大学日本文学専攻院生） Diogo KAUPATEZ

わたしは、富山県によるサンパウロ大学の学生のための奨学金を受けた時から葛飾北斎の研究を始めた。もちろん、以前からサンパウロにある和食レストランで見た「神奈川沖浪裏」（「富嶽三十六景」）や美人画を知っていたのだが、それはこの世界に踏み込むきっかけにすぎなかった。しかし北斎について学ぶことは江戸時代とその伝統を学ぶことであり、日本人が持っていた（そして現在も持っている）集団意識や、北斎が獲得し、また尊敬されていた独特な個性に向きあうことである。

浮世絵師の先行研究を調べると興味深いことに、広重についての文献は多く、国芳や歌麿についての翻訳もかなりの数にのぼるのだが、月岡芳年や東洲斎写楽になるとその数は減る。その他の多数の文献は画集の分野に集中している。例えば勝川流、歌舞伎関連、春画、17世紀の浮世絵師などである。北斎が一流の芸術家であったことには疑う余地はないが、しかしなぜ北斎についての文献は他の浮世絵師と比べものにならないほど多いのか。

北斎の人格は人の魂の奥まで深く染み込むのだと思う。北斎自身が絵を描くという一番好きなことに没頭し、それ以外の家の整理、金銭、外見、華やかさ、女、お酒、高い服などについては関心がなかったようである。一方、支配階級か庶民かを選択するようなとき、北斎は迷わず自らの出自に従い、庶民の日常生活や衣装を、ひとにぎりのすぐれた社会学者でしか把握できないほどの洞察力で描写している。

滞在中、東京国立博物館の「北斎展」、江戸東京博物館、太田記念美術館、浅草寺などを見学することができた。また、永田生慈が創立した研究会の方々に会うことができ、北斎研究の専門家による雑誌も手に入れることができた。神奈川大学COE主催の第1回国際シンポジウムでの企画展示「浮世絵における常識と非常識 復刻版でみる『名所江戸百景』」では伝統的な木版画の摺りの実演を見ることができた。

何かがわかったとはいえないのだが、歌舞伎を観た感動は大きかった。北斎の墓参りをし、北斎の名が付いた通り、生地での建造物、北斎の作品を称えた両国橋の記念碑、「神奈川沖浪裏」が描かれたペン、数多くの本などを見て、日本人が未だにその浮世絵師に敬意を払っていることを理解することができた。

私の研究成果は近いうちに神奈川大学に送る予定である。それは1814年の「漫画」シリーズの初版に至る北斎の人生について研究しており、決して新しい研究ではない。今現在は、全ての作品から「漫画」画集の15編に焦点を合わせた。北斎の浮世絵は一分野だけに偏らないため、様々なテーマについて考える機会ができた。この中には役者似顔絵、美人画、絵巻、刷り物、狂歌、名所絵、浮き絵、「新板浮世絵忠臣蔵」「北斎の東海道五十三次」春画、黄表紙、洒落本、読本、絵画、そして多数の手引きなども含まれている。もちろん「富嶽三十六景」「富嶽百景」「諸国滝廻り」「諸国名橋奇覧」「北斎花鳥画集」など1814年以降に完成した名作も無視できない。

その当時の社会についての研究も必要であった。鎖国時代について、あるいは江戸幕府による浮世絵と浮世絵師の検閲、参勤交代、木版画摺り、江戸時代の芸術家の流派の組織、吉原などの遊郭、遊女の生活など様々なテーマにも触れた。ブラジルには子供用に書かれた薄い本以外には、ポルトガル語での北斎についての文献がない状況であり、私はこの研究では革新的なものを創るつもりはない。なぜなら、あるテーマを考察する論考の場合、その読者が基本的知識を持つことを前提にしている。そうした状況でない以上、まず紹介していき、そこに時折自分の意見も加えるようにした。

この研究が北斎研究全体に貢献できることを望むとともに、今回の充実した滞在の機会を与えてくれた神奈川大学に感謝する。

（ディオゴ・カウパテス氏は2005年11月13日～11月29日まで訪問研究員として来日された。肩書きは日本滞在中のものである。）



神奈川大学COE主催の展示「浮世絵における常識と非常識」にて江戸時代の浮世絵の版画作りを再現

* 本稿は英語で提出されたものをサイモン・ジョン（2005年度COE調査研究協力者）が翻訳し、また紙面の都合から編集部で内容を一部割愛したものである。